

昭和42年3月、14年間にわたる小学校教師の道に別れを告げた。その時、私は48歳だった。「大学生になって間もない子と高校生の子といて、これから益々金が要するという時に、定職を抛つとは無責任ではないか」と妻は責めた。また、「定年まで勤めれば恩給や退職金もふえる」と言って私を思い留ませようとした。

その20年前、私は高校の教師から中学の教師になったが、その時俸給がなにがしか下った。中学の給与体系が高校より悪いからである。この時にも、妻に頭を下げて、「金に代えられぬ仕事だから」と、曲げて同意してもらっている。

次に、指導主事から小学校の平教員になる時もそうだった。この時は、後になって、「指導主事から平教員になるとは、あの男はよほど無能だったに違いない」という噂が、妻の耳にも入って来て、妻はいやな思いをさせられている。

そういう訳で、今までもたびたび妻に迷惑をかけていて、その上ここでそれ以上の迷惑をかけようというのだから、私としても気が引けた。それでも、今まで以上に強硬に反対する妻に対して、私は同意を求めて止まなかった。

妻は、私かなかなか諦めないとみてか、こう提案した。「子供たちもう大きいのだから、子供たちの意見も参考にしましょう」と。そこで2人の子供を呼んで意見を求めた。すると長男は、「お父さんのやりたいようにやるのが良いと思う。そのため学費が出なくなるなら、それくらいは自分で働いて出す」と言い、下の娘もそれに同意した。

妻はこのような返答は予想していなかったに違いない。しかし、こうなった以上、私の希望を容れざるを得ず、こうして定職を離れることになったのである。

その時、宮川書房から、漢字の字源をおもしろく解説した本を書いてほしい、という話があった。その依頼に応じて書き上げたのが『漢字

の神話』である。書き上げたのは10月で、発行は暮の12月であった。

私は、この本の巻頭に、「漢字こそ、文字の名に値する唯一の真の文字である」こと、「最も優れた文字という定評のあるローマ字は、実は不完全極まる文字である」ことを、証拠を挙げて論じた。

朝日ジャーナル誌はこれを大きく取り上げて、「興味ある新説」だと紹介してくれた。また、本そのものも、教師・会社員・学生等あらゆる階層の人々に好評をもって迎えられ、感謝の手紙が日に何通も寄せられるほどであった。

ところが、その印税が一円も入らないうちに宮川書房が倒産し、従って、増刷される機会もなくなってしまった。そこで、その翌年、読み物風に書かれていたこの本を、高校生の漢字学習書に書き換えた。

これが、昭和43年11月に学燈社から刊行された「石井方式・漢字の覚え方」である。この本は「一字を学んで十字を知る」体系的論理的学習を初めて高校生に知らしめた本として、15年たった今でも高校生に愛用され、増刷はすでに33版に及ぶ。

一方、『漢字の神詣』をそのまま復刊したい、という話が朝日ソノラマ社からあった。私は喜んで承諾した。書名も、そのものずばりの『連想式漢字記憶術』と改めると同時に、第1章を全く新たに書き直し、昭和50年10月刊行した。この復刊も好評で世に迎えられ、感謝の手紙が続々と読者から寄せられたのである。

『漢字の周辺』のうち、「漢字訓読の価値」は、財団法人無窮会の主宰する、東洋文化研究所の創設30周年を記念して、昭和45年11月に刊行された、論文集「東洋文化と明日」に寄稿したものであり、「諺の解字・解釈」は、「母と子の新聞」に連載したものを集めたものである。